

深代惇郎著「ぞく ふかしろじゅんろう てんせいじんご続 深代惇郎の天声人語」朝日文庫、朝日新聞出版 2016年2月28日刊を読む

ライスカレー

1. 土用のウシの日がすぎると、炎天の気配が濃くなる。かんかん照りで若者がライスカレーを食べるさまは壯観だ、とだれかの随筆に書いてあったのを思い出す。水を何度もおかわりしながら、ふき出る汗をぬぐってライスカレーを食うのは若者の特権だろう。夏とライスカレーは、まさしく若者のためにある。
2. ところで、あれは「ライスカレー」か「カレーライス」か。漱石の『三四郎』には「本郷の通りの淀見軒という所に引っぱって行って、ライスカレーを食わした」というくだりがあるが、いまは「カレーライス」という言い方が多い。説をなすものがある。ライスカレーはご飯の上にカレーがかけてあるもの。カレーライスの方は、ご飯とカレーが別々に出てくる上等な方だなどというが、あまり当てにはならない。
3. ただ、ライスカレー華やかなりしころは、具はうどん粉ばかりで、肉片にお目にかかるのはまず絶望的だった。「糊^{のり}カレー」というそうだが、野菜以外の固形物が見つかったらめっけものとせねばならなかった。それにひきかえカレーライスは、ソースポットにともかくも実は保証されている。
4. ライスカレー、あるいはカレーライスの良さは、注文して待たされないこと。二、三分もあれば食べ終わられること。かくて早めし族の日本人に、なくてはならぬものとなった。故池田首相は、ライスカレーの大盛りが大好きだったらしい。あの声は、ノドをカレーでやられたせいではないかという推理もあった。
5. 声でいうなら田中首相もカレー好きはずなのだが、首相官邸に問い合わせると、やはり「よく召し上がります」という返事だった。きっと汗をふきふき、召し上がっているにちがいない。ライスカレーを食べるたびに感心するのは、福神づけ、ラッキョウ、紅ショウガというつけ合わせだ。だれが考えついたのか、まことに日本的独創に富んでいる。(1974年7月24日)

<コメント>

朝日新聞の「天声人語」を執筆中に天寿を全うした、名コラムニスト深代惇郎氏の数多い「天声人語」の中で最もお気に入りの文章です。第1巻目に続き、第2巻目も是非、御一読を。

— 2016年2月11日(水) 林 明夫記 —